

統合国際深海掘削計画 (IODP) 会議報告書

提出年月日： 平成 19 年 11 月 26 日

氏名： 多田隆治

所属 (職名): 東京大学大学院理学系研究科・教授

会議名	SSEP
期間 (移動を含む)	平成 19 年 11 月 12 日 ~ 平成 19 年 11 月 15 日
用務地 (国・都市)	フランス ボルドー
目的	IODP に提出された提案書の評価
<p><u>会議内容及び報告事項</u></p> <p>12日は、各種委員会報告の後、Palike から、Implementation Plan 案に関する説明があり、その後、Implementation Plan 案に関する議論が行なわれた。議論の結果を Co-chairs が引き取り、最終日までに、SSEP の意見案を作成する事となった。</p> <p>12日夕方から13日一杯かけて、Breakout Session で proposal の議論が行なわれた。今回提出された proposal は、Pre および APL を含めて17、external review の結果が5つと少なかったので、Solid Session と Climate+Fluid Flow-Biosphere Session の2つに分かれて議論を行なった。</p> <p>そして14日には Joint session で、proposal review の結果を取りまとめた。結果は、1つの APL を含む8つの proposal が SPC へと送られ、2つの proposal が external review にまわされ、2つが deactivate となり、残りは revise となった。</p> <p>15日午前中は、joint session で再び Implementation Plan に対する議論が行なわれた。まず、Palike によって、co-chairs の取りまとめ案が示され、それをたたき台に、SSEP の4項目の合意意見がまとめられた。私の記憶によると、それは、</p> <ol style="list-style-type: none">1) Implementation Plan で、IODP がおかれた厳しい予算の現状を community に知らせる事は重要である。2) OTF や SPC に既にある既存の proposal からスケジュールに入れる proposal を選ぶ際に、新たに示された guiding principles を用いて再評価する事は必要な事と思われる。3) しかし、同時に、Implementation Plan では、次期への継続を見据えて、新しく魅力的な proposal を積極的に受入れるとの positive なメッセージが不可欠である。4) 選別基準や経緯もわからぬまま突然示された4つの重点領域を、新たな proposal も含めた proposal 評価の基準に用いる事には賛成出来ない。(それらは、研究範囲を狭め、示された領域外にある impact のある研究を閉め出してしまう、また IODP 離れを促進しかねない。場渡りのトップダウンによるのではなく、しかるべき手順を踏んで ISP を revise するべきである。) <p>日本からの新たな co-chair として石渡氏が選ばれた。また、次回の SSEP は、5月19・22日にかけて、韓国釜山で開催される予定である。</p>	